

第5期武蔵野市子どもプラン推進地域協議会（第2回）会議要録

○日 時	平成30年7月20日（金） 午後6時30分～午後8時30分
○場 所	武蔵野市役所 811 会議室
○出席委員	松田委員、見城委員、加藤委員、西巻委員、平野委員、古田委員、 神足委員、川田委員、大沢委員、堀内委員、三富委員、狩野委員、 秋山委員
○事務局	子ども家庭部長、教育部長 他

1 開会

2 報告事項

<事務局より資料1～10 について説明>

3 議事

<子ども・子育て支援に関する課題等について（各委員からの自由意見）>

【委員】

現在、保育士の確保が非常に困難な状況となっており、「保育士の処遇改善」という事が保育の質の向上には欠かせない課題だと思っている。

また、ある調査によると、日本の子どもの自己肯定感が諸外国に比べて非常に低い。子どもが自分自身に満足しているという割合が非常に低く、だめな人間だと思ったことがあるという割合が非常に高い。自分の将来に希望を持っている割合も低く、これは行政でも深刻な問題として考えていかなければならないと思う。保育園の中でも、自分を肯定的に受け入れられなければ、他者を受け入れたり協力し合うこともできない。子どもの権利条約を初め、新しく改定された保育指針にも「子どもの最善の利益」ということがうたわれているのにもかかわらず、こうした現状をなかなか変えていくことができていない。

実際の保育園の中では、1人1人が尊重される園づくりを目指して、昨年度も「子どもの願いから出発する保育」ということを中心テーマに据えて、子どもたち1人1人の願いを日々の生活の中でどうやってしっかり受けとめていくか、そして、子どもたちが生活や人生の主人公として誇りや意欲を持てるようにということで、保育を見直すような取り組みを行っている。年齢が上がっていくほど自己肯定感の割合が低くなっていくという調査結果もあるため、就学前だけではなく、就学後も見通した関係機関の連携した取り組みが本当に必要であると思う。

【委員】

学童の定員について、市でも利用者の増加に伴って数を増やしていると思うが、共働きの方が多く、学童の利用者もどんどん増えていくという中で、このままでは学童でも待機児童が出かね

ない、と保護者同士でも話をしている。学童も保育園と一緒に、定員を増やしてもなかなか追いつかないという状況になりかねない話だと思うが、その点はきちんと対応していただきたい。

また、学童に通う子どもが4年生になったらどうしよう、というのが保護者の共通した思いである。4年生になったからといって親の仕事が早く終わるわけでもなく、3年生から4年生になっても、成長はするがそれほど変わらない小学生であるということで、学童を利用できる年齢をもう少し引き上げることも将来的には検討していただけたら非常にありがたい。

武蔵野市に引っ越したいが保育園の状況がわからないから断念した、という知り合いもあり、保育園の問題は武蔵野市だけの問題ではないが、子育て世代でも安心して引っ越して来られるような環境ができればよいと思う。

【委員】

働き方改革関連法案が成立し、企業でも、ワーク・ライフ・バランスやワーク・ライフ・マネジメント、ダイバーシティ、女性の活躍推進等の考え方を基本に、積極的な取り組みを行っている。

昨年から導入したテレワーク制度は、毎月少しずつ利用者が増えている。また、時間単位休暇のしくみを作り、子育てや介護のために少し早めに帰宅することもできるようになった。また、育児休業制度についても、男性が取得するケースも少しずつ出てきた。

このような取り組みは、企業のトップ、マネジメントの側から積極的に考えていかないとなかなか進まない。女性の働きやすさなどが結果的には子育ての支援につながってくるとの考えで、仕組みづくりや活動を進めている状況である。

【委員】

最近、地域で子どもを育てることが少しおろそかになってしまっているのではないかと考えている。私が子どものころは、毎日のように地域の大人たちにいろいろなことを教えてもらい、学ぶことも多かった。現在所属している武蔵野青年会議所では、子どもたちの健全なる育成ということも目指して活動している団体で、例年わんぱく相撲を実施しているが、毎年、児童の参加がどんどん減っている。できれば学校単位、地域単位、市単位でこういう学校外の活動にも積極的に出てこられるような環境をぜひつくっていただきたい。

先ほどの話にもあったように、働きながらの子育てはつらい面もあるため、企業でもいろいろな取り組みをされていると思うが、市としても、各企業がどのような取り組みができるかというところも踏まえつつ、子どもをつくりたくてもつけれないという環境をできる限りなくしていただきたいと思う。

【委員】

日本の人口減、少子化の深刻な現状を、武蔵野市に居住していると見失いがちになるが、とても大きな問題だと思う。行政が将来を見据えて教育や児童養護に英知と予算をかける必要性を痛感している。

教育の観点としては、児童・生徒にとっては、人間関係を学んだり職業観を培ったりするためには、さまざまな実体験が必要であると思う。その点武蔵野市は、長年にわたってジャンボリーやセカンドスクール事業などを展開し、成果を上げている。今後はさらに地元の住人が、「おらが学校」にかかわる地域コミュニティの輪を、義務教育全体に広げるとよいのではないかとと思う。

小学校ではPTAやおやじの会などが深く応援しているが、それを中学校区まで広げて、中学

生がさらに幅広い人材と身近に接して、キャリア教育や防災教育などで学び、さらに地域愛を深める教育を推進していただきたいと思う。

学校の先生方が激務をこなしている実態が「きょういく武蔵野」に載っていたが、そのような実態を地元人材にしっかりと開いて、地域にいる大勢の有能な人材が各々のキャリアを学校教育に還元するシステムを、行政こそつくり出せると考える。

児童養護という観点では、児童福祉法が改正され「新しい社会的養育ビジョン」が示されている。少子化とはいえ、今、私がかかわっている児童養護施設には、連日児童相談所から虐待等による入所依頼の電話がかかってくる。国は、施設ではなく里親を推奨する流れであるが、当施設において里親として家庭に引き取られる児童はここ3年程で数例のみという現実がある。武蔵野市は保育園や幼稚園問題をはじめ子育て支援に力を入れているが、社会資源等の直接の支援だけでなく、共助となる地域づくりも大切であり、行政としての一層の支援システムの構築に期待したい。

【委員】

小・中学生、高校生に対する支援については、助成金をはじめ様々な支援があり、本日の資料4、5「子どもの相談・支援情報」のリーフレットにも細かく記載されているが、課題としては、制度やリーフレット自体がとてもわかりづらい。せつかくのよい支援制度なので、もっと理解しやすいように、わかりやすく周知してほしい。

また、小中一貫教育についても気になっている。これまでの議論でも、現実的・物理的に実現できるのかどうか、という疑問が必ず出てきているが、具体的な議論はされていない。もう少し話が進むと、地域によってできるとかできないとか、賛成・反対というものも出てくると思う。そろそろもっと突っ込んだ話をするべきだと思う。

また、地域の人たちが学校の運営に参画する「コミュニティスクール」の構想や、市の「地域コーディネーター」もそうだが、武蔵野市のように学校が全18校という、比較的小規模な地域だからこそできることと思う。ただ、最近、青少協、PTA、おやじの会もそうだが、人材不足で担い手が同じ人ばかりになってしまうという点は、結構深刻な問題である。地域の人材を発掘するという点で、早め早めに何か手を打たないといけないと思う。

地域コーディネーターとして中学生の職場体験の連絡調整を行う中で、地域には中学生の職場体験を知らない会社もあり、受け入れを断られることもある。地域とのコミュニケーション、情報共有が、人材発掘とともに今後どんどん必要になっていくのではないかと、今やらないとまずいのではないかと、せつかくいいことをいろいろやっている武蔵野市だが、5年後、10年後は本当に大丈夫なのか、早め早めにやりたいと思う。

【委員】

根本的に子どもも親も地域も、全員が忙しい。子どもだけが忙しいのではなく、親も、地域も、教員も忙しい。全員が忙しいというところをこれからどうやっていくか。勿論この会議は、制度等について話し合う場としてはとても有効だが、制度というのは、もしお金があればお金をつけられればいいし、託児所をつくれればいい。そうではなくて、「時間」をどうやって編み出していくかということが課題ではないか。武蔵野市はいろいろな企画や行事があり、非常に助かっているという面もあるが、忙しいから、やりたくてもやれないという部分も出てきていると思う。質を下げたはいいが、様々な企画等の実施については、今までやってきたからやるというのではなく

て、これからは意識的にやめていく、そういう勇気も必要なのではないかなと思っている。

忙し過ぎる実態でどうやって時間をつくっていくか、そこから逃げないでこれからの子育てのことを考えていく。これは国レベルの問題だから、ということではなく、逆に国を動かすぐらいのことをやっていかなければと思っている。とにかく少子化とか後継者がいないとか、私も現場として切実にわかっているので、ここで何か時間をつくる方策をつくっていただけたいと思っている。

【委員】

世の中は少子化と言われているが、武蔵野市では子どもが年々増えていて、学校も教室が足りないなど、大変な状況が続いていると思う。資料6のチラシ「すくすくふぁ〜すと」にも記載されているように、市でも様々な窓口を設けたり、ファミリー・サポート・センターが始まったりと、支援の方法を考えていただいている。しかし、例えば、乳児の親子は 0123 施設に行けば遊べる、小学生はあそべえに、幼稚園児がいれば幼稚園に行っているからいいかなと思うが、お母さんがその3人を一緒に遊びに連れていきたいという際に、どこに連れていけばよいか、実は武蔵野市にはそういうところがない。桜堤児童館が1館あるが、市境にあるので、小さい子どもたちを何人も連れて遠くまで行くのはとても大変だし、市民でも知らない方もたくさんいると思う。

0123 施設は3歳児までしか入れない、4歳児になったら幼稚園があるが、幼稚園が夏休み等でお休みの間、4～5歳児はどこで遊んだらいいの、ということになってしまう。異年齢の子どもたちが一緒に遊べる場所がないと思う。

また、資料のマップを見てもわかるように、市の西側、中央、東側と見ると、東側は本当に施設がない。東側の子連れのお母さんは、どこで遊んだらいいのかとても悩んでいる。東側は土地がとても高いということで、市では施設は建てられないと言われるが、その辺も考えていただけたらありがたい。

また、今、虐待、ネグレクトが増えてきていて、子ども食堂や学習支援を必要とされている方も増えてきているが、対象になるお子さんをうまく招き入れることがとても難しい。まずは学習から、という感じで、学習支援から取り組んでいるところもあるが、食べることに大変な子、親が働きに行ってお金だけ置いていく、という家庭も少なくはない。「子ども食堂」にも、電車に乗ってご飯を食べに来るような子どもも実際にいるので、市としても、子ども食堂や学習支援に対して考えていただけたらありがたい。

あと、先ほども話にあった里親制度についてだが、武蔵野市で里親登録されている方はとても少ない。里親家庭が普通に地域に受け入れられるような、そういう地域づくりができたらいと思うので、市でも支援や対策をしていただきたいと思う。

【委員】

今回の資料にも保育園の開設の話があり、それは非常にありがたいが、吉祥寺の方に保育園が足りないという事を訴えている人たちもいる。吉祥寺南町で事業者の公募が始まるようだが、こちらの保育園はぜひつくっていただきたいと思う。

保育園を増やすほかに、質についてもきちんと考えていってほしい。保育士の離職が問題になっているが、一斉に辞められると、預けている側からすると、先生がいきなり違う先生になり、今までと全然違う雰囲気になって、お母さんも子どもも不安になるので、その辺も今後ちゃんとケアしていただきたい。

普段保育園を利用して助かっているが、保育園では結構厳しいことを言われることがある。もっと夜早く寝かせられないか、野菜を食べさせて等…。こちらもわかっているけれどできない、園との共感がなかなか難しいと感じている。

また、「子育て世代包括支援センター」についてだが、18歳まで切れ目なく支援するというのはとてもよいと思うが、18歳からまた次にうまく引き継げるのかも考えていただきたい。法律が改正されて18歳で大人になっても、すぐに自立せず、大学等に行く人も多いと思うので、ひとり立ちするまでの期間の支援も、別のところかもしれないがうまく引き継いでやっていただきたい。

保育園の無償化の話について、今も例えば3人同時に保育園に入っていると、3人目は無料になるが、同時でなければ無料にならない。結局、ルールを決めると、それからはみ出る人の不公平感がどうしても出てくるので、不公平感がないように決めていただけたらと思っている。

最後に、小中一貫の件で、小中学校の職員の連携した取り組みを進めるとのことだが、連携していく余裕があるのか、何となく疑問も感じている。先ほどの話にもあったが、先生たちはそもそも忙し過ぎるのではないか、もっとほかのところの負担を減らさないと連携する余裕は出てこないと思う。保育士や先生等の働き過ぎを何とかしていただけたらと思う。

【委員】

今年度から保育園を立ち上げ、保育士の確保、質の向上ということが厳しい問題であることを実感した。現状では、ブランクがある保育士も、それを埋める間もなく現場に出て行かなければならず、その質を向上するまでに至らない。そのような中で、子どもの安全は第一に考えなければいけない。今まで行ってきた小規模保育事業とはかなり違うものだというのをひしひしと感じている。

また、市内には比較的多くの公園があるが、その公園の設備が暗かったり、子どもたちを連れていけないようなところだったりすると、行ける公園に限られ、そこに、たくさんの保育園の子どもたちが集中してしまう。同じ時間帯にいろんな保育園の子どもたちが来ている中で安全を確保するのは、すごく難しいことだと感じている。小さな公園は遊べないし、遊具が多いと危険も多いのでそれも遊べない。大きい公園に、いろいろな保育園が集中してしまう。新しい保育園は、園庭のない保育園もあるので、外に集中してしまうのは一つの課題であると思っている。

あと、保育園以外にも、個人保育から産前産後、ひとり親家庭等様々な支援を行っているが、それは、主婦である方たちも対象にして行っている支援である。今は、まずは保育園の整備を進めるべきということで、働く方のためのいろいろなことは考えられていくが、家庭で一生懸命子どもを育てている方のための援助が少ないかなと感じている。一時保育も、主婦の方のためにはとても大事なもので、一時的に安心して子どもを預けられるところ、そこに預けることによって自分がリフレッシュされて、また子どもと向き合うことができる場所を求めている方がたくさんいる。そういう方を拾い上げるというのが、今、武蔵野市はないかなと少し感じている。

【委員】

子どもプラン武蔵野の中には、子ども・子育て支援法の事業計画が含まれているわけだが、この事業計画は、国が決めるわけではなく、市区町村の意思で決めるものとなっている。今日のこの会議が、市民のためにどうすればいいのかということを考え、いろいろな意見を出すことができることとなっているわけである。

国の会議でも強く感じることは、子ども・子育て支援法に基づく新制度が、0から5歳までは福祉のルール、6歳から義務教育のルールとなっており、3、4、5歳を中心とした育ち合いの幼稚園というのは、この中にもものすごく入りにくい。例えば、資料3 子育て世代包括支援センターの例で言うと、「産後」から「育児」のステージへ入ったときに、子育て支援策としては「保育所」と書いてあって、「幼稚園」は無く、「そのほかの支援策」のほうに入ってくる。包括支援センターの制度設計は厚労省が行っているため、学校教育である幼稚園は範疇にないわけで、そこをどう取り込んでいくのかというのが市に求められると思う。

とりわけ武蔵野市は、3、4、5歳児の過半数は幼稚園を使って子育てしており、働くことも大事だけれどそれよりも今は子育てしたい、というニーズがあるからこういう状態が残っているわけである。書類上は、幼稚園にいる子どもは全て新制度上の1号に算定されている。けれども、1号児という中で、幼児教育をしっかりと求めたい場合、「幼稚園教育」というものの独自性やインセンティブは見えてこない。(結果、私学助成園としての幼稚園となっている)福祉のほうから見ると、保育所に関しては、幼児教育施設だけ福祉としてもしっかり手当てしていく、となる。でも、それは本当に武蔵野市のニーズに合っているかどうか。幼稚園がもっと幼児教育を深めていくような支援の仕方はないのだろうか。

一方、預かり保育は増加しており、幼稚園教育を基盤にしながら預かり保育をして、仕事との両立を図ろうという方も一定数伸びてきているが、そこに関しては施設や園庭の使い方も相当変わってくるので、いろんな工夫や投資もしていかなければならない。

子どもプラン武蔵野においては、幼稚園や保育園、どちらも幼児教育をやっているが、教育にインセンティブをかける、教育でもう少ししっかりやりたいときに、幼稚園に対する支援策は一体どのように位置づけていくのか、そこも含めてきちんとこれからの制度設計をしていただきたい。

【副会長】

1つは子どもの貧困対策について、全国的に見れば、16%の子どもが貧困状況に置かれているのが実態であり、先ほどのお話にもあったが、武蔵野市でもそういった状況に置かれている子どもが皆無ではない。子どもの貧困は、教育機会の格差、そして最終的な学歴の格差を媒介して、貧困の再生産につながると言われており、生まれによって、得られる教育や社会に出たときのチャンスに大きな差がついてしまうのは、社会の活力を必ずそいでいくと思う。子どもが絶望に陥らないような、そういった社会であってほしい。この問題は実態を把握することすら難しいらしいが、まずは実態をしっかり把握して、武蔵野市でできることをしっかりと考えていく必要があるのではないか。

もう1つは、子育て中の方で、標準的な支援対象から外れるような方たちへの支援もしっかり考えていく必要がある。最近、いわゆる子育て世代とこれまで呼ばれてきた世代よりもちょっと上の方たちで、初めて子どもを持つという方たちが増えてきた印象がある。恐らくそういう方たちは、いわゆる子育て世代とは少し違うニーズ、悩み、問題を抱えている可能性があり、そういう方たちが必要とするような支援も考えていく必要がある。

また、例えば障害を持った家庭、外国から武蔵野市にやってきて一時的に住む家庭、そういった家庭が必要とする支援というのはまた違ってくる。より多くの方たち、より多くの状況にある子どもたちを包括できるような支援モデルを考えれば、いわゆるユニバーサルなモデル、あるいは

はインクルーシブなモデルを考えることによって、それ以外の方たちにも対応できる。現在の様々な制度はゆとりがなさ過ぎ、そこからは社会の活力は生まれないのではないかと。

大学で教えていると、日本の大学の一番の問題は、多様性が欠けていることだと思う。人と違うということに慣れていない、人に否定されることを非常に怖がり、議論で人とぶつかることができない。でも、それでは新しいものは生まれてこない。お互いの違いを前提にした上で、そこから何か共有できるもの、ともに目指せるものを、知恵を寄せ合って考えていこう、議論していこうという雰囲気が生まれないと、社会全体の活力の低下につながっていくと思う。

【会長】

委員の皆様から一通り意見をいただいた。これがベースとなって、次の子どもプランの作成にしっかりと反映されていくことが必要であると思いながら伺った。

他の委員の意見を伺って、追加あるいはそれに呼応して意見はあるか。

【委員】

今までやっていたからやるでは忙しさは変わらない、何かやめないと次の新しいことができない、と。まさに企業もその通りで、同じことをやっていたら、新しい事業や製品はなかなかできない、企業としてもそこを抜本的に直さないといけないと最近特に感じている。労働時間は減らし、生産性は上げていかなければいけない、何かをやめる、ということ、今、始めるところである。

行政でも、既に考慮されているとは思いますが、非常に重要な視点だと思ったので意見させていただいた。

【委員】

この第四次子どもプランの冊子は、本当に詳しくよくできているとは思いますが、1つのわかりやすい目標として、次期プランを作成する際には、ページ数が半分になるくらいシンプルにしていく必要があるのではないかと。ここから精査していかないと、増える一方ということによって変わっていかないと。保育士の質とか、人が足りないというのも、余裕がないからではないか、そういうところに給料を上げていけば、人も集まるし、最終的には子育ての向上に結びついていくのではないかと私は思っている。

【委員】

年中から小学生まで3人の子どもが居り、皆で一緒にどこに遊びに行ったらいいかという悩みにまさはまっています。もう少し大きい枠で面倒を見てくれるようなところがあるといいなと思っています。

やはり、お母さんが笑っていないと、子どもも笑わない。働いているお母さんたちも働いていないお母さんたちも忙しいので、そこを助けてくれるような、お母さんだけでなく、お父さんも含めた、そういう支援があるとよいと思う。みんながもう少し余裕を持って、温かく見守っていただけるといいと思う。

【会長】

委員の皆様のお考えを次のプラン作成にぜひ反映させていきたい、市でも今日はそのためにしっかりとご意見を伺いたいということであったと思う。さらに、今後の議論でこれを広げたり深めていったりということができればと思う。

4 その他

議事要録の送付・確認について、報酬の振込について、今後の協議会の日程（第3回：10月9日、第4回：平成31年2月18日、第5回：平成31年3月22日）について

以上